

2013/14 サッカー競技規則の改正に関する補足説明

NPO 多摩サッカー協会・審判委員会

本年6月25日に(公財)日本サッカー協会(以下JFA)から、「2013年競技規則追加改正について」という通達が出ました。通達の内容はJFAのホームページでご確認ください。

その通達の中で、11条のオフサイドの内容に関する「FIFAからの提案」として競技規則の新しい文章が紹介され、特に“その位置にいることによって利益を得る”の内容に関しては「一部(解釈の)修正」(JFA)が必要との記載が日本語版付録のP175にあります。国際サッカー連盟(以下FIFA)は競技規則を変更したのではなく解釈の幅を狭めより明確にすることを意図して表現を変更した、というのがJFAの見解です。

そこで多摩協会の公式試合に携わる審判員の皆さん同志で新しい解釈を共有する一助として、今回文書に加えられた新しい言葉を中心に説明を補足しました。9月以降のレフェリングの際の参考にして下さい。なお、この文章は8/30時点の当協会・審判委員会の見識に基づくものであることをご確認ください。

※ ※ ※

オフサイド成立の3つの定義

第11条オフサイド(p35)の、オフサイドの反則となる3つの定義に関して、表記の変更内容を確認しましょう。

## 1) プレーに干渉する

表現、表記に変更はありません

## 2) 相手競技者に干渉する

"相手競技者に干渉する"行為として、従来は「相手競技者の視線を遮る」行為に加えて、相手競技者の動きを「妨げる」、「惑わす」、「混乱させる」という3つの行為が列記されていました。

これら3つの行為は本年度から「ボールに向かう相手競技者にチャレンジする」という一文にまとめられました。相手競技者のプレー、またはプレーする可能性を妨げる行為を指すことに変更はなく、「チャレンジする」(p108,113,114)という表記だけの変更とご理解下さい。

## 3) その位置にいることによって利益を得る

ゴールポスト、クロスバー、または相手競技者からはね返ったボールを既にオフサイドポジションにいる攻撃側競技者がプレーすれば、従来通りオフサイドのファウルとなり間接FKで罰せられます。ただし、「相手競技者からはね返る」という表現では、ボールに当たった守備側競技者の状況によってオフサイドか否かの解釈に幅ができるとの懸念がFIFAにありました。そこで

1. ゴールポスト、クロスバー、ボールをプレーする意思のない相手競技者にボールが触れた場合
2. 意図をもってプレーしている相手競技者がボールに触れた場合

の2つの状況に分けて、より具体的な内容を記述しました。

1 の場合は、従来通り「オフサイド」が成立します。守備側競技者にプレーする意思があったか、あるいはボールから当たったのかの判断は、12 条のハンドリングのファウルの判断に近いものと言えます。つまり審判チームの各員が

- 距離：蹴られたボールを避けるあるいは扱える距離、間合いだったか
- 時間：ボールが当たるまでの時間で意図的にプレーする可能性はあったか
- 意図：姿勢、視線等から、守備側競技者はボールにプレーしようとしていたか

の 3 つの要素をもとにオフサイドかどうかを見極めて、最終的には主審が判定を下すことになります。

2 の場合、シュートされてゴールに向かうボールを守備側競技者（GK を含む）が意図的にセーブし、ボールがはね返った、方向が変わった、またはプレーされた時には、そのボールは従来通り“オフサイド”の対象となり、オフサイドポジションにいた攻撃側の味方競技者がプレーすれば「オフサイド」のファウルが成立します。

「(意図的に) セーブする」(p108,114,115)は今回初めて競技規則で用いられた表現ですが、守備側競技者(GK を含む)の、ボールがゴールに向かうのを防ぐあるいは防ごうとするプレーと理解して下さい。図 11(p115)も新たな例として加えられました。

この「セーブする」場合とは異なり、ゴールに向かっているボールを守備側競技者がプレーした時には、その結果が守備側競技者の思い通りにはならなかったとしてもプレーされたボールはオフサイドの対象とはならず、オフサイドポジションにいた攻撃側競技者もプレーをすることができます。

これまで日本国内では、プレーする守備側競技者の体勢、技術精度をオフサイドの判断に加味するケースがありました。今回の解釈の変更により、このケースでは守備側競技者がボールに触れたか否かをより慎重に見極めたうえで、触れられた（プレーされた）後のボールを“オフサイド”の対象とは見なさないことになります。

以上の解釈や適用の趣旨をご理解の上で、参考資料である JFA ホームページの

「2013/14 年競技規則の改正について（第 11 条-オフサイド競技規則の解釈の変更）」

の映像の具体例をご覧ください。サッカーのゲームの中で具体例と全く同じ情景が再現されることはありません。映像に出てくる競技者の動きやプレーの間合いにイメージを縛られ過ぎることなく、競技規則のベースにある精神を理解、あるいは確認するツールとして利用することが肝要です。

こうした競技規則の解釈変更は、適用当初には試合や指導の現場での混乱を生じさせる可能性もありますが、まずは審判員各員が変更内容を整理し趣旨自体をよく理解したうえで、最新の正しい解釈の適用に努めましょう。試合中の主審と副審の協力はもちろんですし、少しでも不明や疑問がある場合には、試合に臨む前に解消できるようお互いに意思疎通を図りましょう。質問等を当協会・審判委員会にお送り頂いても結構です。可能な範囲で最新の情報と回答をお送りできるよう努力してまいります。

以上